

紫

松岡篤子

夕刻、かなちゃん家の玄関先に一茎の花を見留めた。柔らかく翳るあたりの景色の中にあってその色は濃い紫と知れる。

昼間のみほの描いたのはこれじゃないか。

いつもの線書きのセーラームーンの絵に混じってこっそり塗られた紫の花冠が一際目を引いた。

みほがかなちゃん家に行くと言い置いて自家を走り出し、程なくして戻って「誰も居らっさんやった。」と家人に告げ、次の遊びをあそび始めたのは真昼のことである。

あてにしていた仲良しのいないこと、また懇ろな応対をしてくれるはずの子の家族の気配もないこと。それに思い至るまでに友だちの名を呼んだのは、一度きりだったろうか。

息を整え返事を待って耳をすます。

幼い背丈の胸の高さもあろうか、鉢植えの一茎の花を幾度となく眺める。

夏休みの昼のしじま。田んぼと段々畑の風景の中、自分が途方もなく小さくなって消え入るような心もとなさ。その時も、友だちを諦めてひらりと向きを変える刹那も花は立っている。

帰る道道花のイメージを取りこぼすまいと用心しながら何度も思いだしながら。

いや思いつく限りの次から次の活動でいっぱいになって花は意識の及ばぬ奥に潜り込んでしまったかわからない。

ただ、どうしたことかおもいたってせつせと塗り込んだ紫の花。輪郭が不揃いな幾筋もの花びらや花卉の襞がかえって見る者の想像をかきたてる。茎と葉が申しわけ程度にはあるが描かれている。その長さは花の大きさに比して実物のひよろ長さを表すには充分であった。